●この八月に　はじめて私の詩集が出来る。つむぐの編集者の原田克子さんと田中眞由美さんが、八十才の記念に出しなさいと背中を押して下さった。世話のやける老人が私らしい。

とよださなえ

お部屋の中で

香気を放なつ夏みかんも
コップの中のまっかなバラの花も
そして　静かに飲む新茶も
みんな　春のたゝずまい
私の顔に
私の心に
五月のたゝずまいがあるのだろうか

—１９６３・５－

新茶

新茶を飲んでいます
新茶の香りは貴いものです
新茶を飲んでいると
五月は私のものであるような
うれしさ
抑えきれない程の
五月の喜びを感じます

－１９６１・５－

六月は

六月は保障証の欲しい月だ
何かはっきりした
何かへの保障
六月はいうに言われない
気むずかしさ
それも　訳もなく気まぐれの
わがまゝな

シーツの白さについて

こうやって
シーツの白さを
有難がる奴もいることだろう
シーツに出来た小さなシミにさえ
ヒステリックな声をたてる
女たちも居ることだろう
シーツの白さなんか
てんで気にせず
グーグー眠りこける
男どもも居ることだろう
それから　どんな奴が?!
つぎはぎの汚れたシーツの中で
唸いているおじさんがいる
そして　駅に新聞を敷いて
寝る野郎もいることだ

—１９５９・５・６—

ワシントンハイツにて

ツイビツイビ
二世のケシイが呼ぶと
兎のような白いプードルが
光った廊下を走ってくる

チビというのが本名なのだが
卓球をして汗を流すと
オヘソを出して　床に横になる
連中もわざわざ
ツイビと舌をかみかみ発音する
まるで　もう一本葉巻がもらえるかも知れないと
予測しているみたいだ

床屋に行って
パジャマを着たような恰好のチビ
毛が長く伸びて
充分目もあけていられないチビ

speak　とか　sit down　おて！　とか
チャンポンに仕込まれて
どれも良くわからないチビ
可愛いチビだけど
チビはチビだけではいられない

ゲイトの番人は
最近　戦争直後と変わって
少しは日本人同士らしく振る舞うようになった　と
年をとる内にいつの間にか課長になった男が言った
長と名の付く男が五人
息子のパンツをとりかえる回数を気にしている奴とか
神宮からでてきたしま蛇を料理して食ってしまう
部下たちに顔をしかめつつ
ふるえている奴とか
少々ギャラの良い軍属のタイピストの高笑いを
気にしている奴とか
昨日から課長になった為　非組合員の若手は
押しつけられた対組合の案を考え
低姿勢と高姿勢がまじって
まるで人を使えないとか

こんな机の間を　チビは
誰もかまってくれない時
とび跳ねて歩く
極くおじさん的に一寸頭をなぜてくれるか
ズボンに足をかけられない程度に
笑ってみせるか

チビの相手と世話は
作業ズボンと丸首の連中がもってこいで
ツイビ様にお湯をつかわすことで
仕事時間をつぶす
花嫁に逃げられてチビの触感を楽しむ者
ダンスと労働学校の時間割のことで
クヨクヨしている者
月賦支払いをすますと二千円なにがしかしか
残らぬのに
二十円のコカコーラをチビに飲ませる絵入りポロシャツ
飲み過ぎがもとで夫婦ゲンカをした赤顔半裸者は

時に応じて
チビを可愛がる
この中で
チビは半分チビのチビであり
ケシイのチビである
この仕事場に
ナッパ服がとても似合う男がいた
ウクレレとギターには合わないが
良い声をもち
レーニンをかじりながら少々の野心をもち
惜しいことに　全く残念なことに
野球と卓球に於いて何らの才能も興味もみせなかった
彼は〇〇公社労組の分会長だ

彼は人にも犬にも好かれる性ではないのを知っていて
少しずつ努力をしているのだそうだから
お湯の設備の良い洗面所で
〝アメリカ帝国主義のお湯だ
　　どんどん使え！〟
と　ホンのシャレを言って
帝国主義者のペットであるチビをいじめる
総計三十名の職場大会の上席に座り
流暢に漢字とカタカナの多い言葉で話しても
かなりの無関心と冷笑をかう
理論と人情とピンポンのうまさとは
別々のものではないらしい
非科学的なものが
先んじることがあるということを
納得しない彼に
チビは全く振り向きもしない

詩組織　7号　１９６２年8月15日

エッセイ：日本の戦後七十三年

今年は戦後七十三年という。終戦の年、私は小学校一年生。早あがりだから七才だった。73に7を足すと80、つまり私の年80才となる。

昭和二十年八月十五日、普段は茶の間に置かれていたラジオを、お座敷の床の間に運んだ。天皇陛下のお言葉を拝聴する為に、お昼の十二時、母と姉二人と四人でラジオの前に正座した。今でこそ何度も何度も耳にしたお声だが、当時の私にとっては、全く聞きなれ

ない種類のお声であり、お言葉でさっぱり意味はわからなかった。十一才と九才の姉はどんな顔をしているのかと見たが、無表情なまゝだった。母一人、眼鏡をはずし涙を流していた。日本は戦争に負けたのよ。その後、B29 はもう来ないから、防空壕に入らなくても良いとか、夜燈に黒い布を被せなくて、明るいまゝで良いとか、モンペをはかないで、スカートをはいても良いとか。父は私が六つの時、二等兵で召集されていた。宇都宮師範学校の教師だったので、先生方や大勢の学生が駅前に集り、万才三唱をしていた。一寸離れた所で父の側に立っていたので、その家族の一人だという感覚はあった。その時の父の顔は見たことのないような固い表情だった。父は東京湾で通信兵だった為秋には無事帰宅出来た。

ある夏の日、何年かは定かではないが、お下りのワンピースを着て近所の子と遊んでいる時、十人位の大人が小さな黒板を持ったりして我が家に入っていくのを見た。ローマ字を小学校で教えることになり、母の所に教わりに来たのだ。受持ちの先生は女性で大分年輩であったせいか、そのグループの中にはいらっしゃらなかった。ローマ字の教科書を手にしたのは、多分　五年生の時だった。母が女子大学で英文科を出、英語の出版社で働いていたことを、どの程度か聞き知った隣組の方々は戦争中、配給の時に、母には親切でなかったらしい。英語は敵性語であったから。どこから話が伝わるのか。

小学校の時からの友人が、最近、つぶやいた言葉がある。彼女の父親は東京の有名な大学の英文学の教授だった。「私は小さかったから言われなかったけれど、大きい姉はスパイの子って言われていた」と。姉の友人の父親は地方紙の論説を書いていた。戦争を讃美してきたとして、首になったという。子供心にも、身近で親しくしている方々に、終戦で色んな事が起きてくるんだなぁと思わされた。

父の所へは、囲碁を打つ近所の人や、先生仲間が来ていた。その中に一人女性がいた。部隊長と呼ばれていた人の奥さんだった。私たち子供は、名字を言わずブタイチョウさんと呼んでいた。ブタイチョウはいつも数人の兵隊がいて、大声で叱ったり、威張っていた。奥さんが我家に出入りする時の雰囲気も、声の出し方にも品がなかった。ガッカリした。「戦争が負けなかったら、あゝいう人が威張り続けたんだ」とは父の言葉。母の所には、小学校の先生数人がローマ字から英語に変え、勉強を続けていた。中学生、高校も続いていた。

戦後、戦後という言葉を何気なく使っている日本人を見ていて、私は居心地の悪さを感じるようになった。この八十才になる迄に、戦後でなく、まだ戦争中の国々があったからだ。戦争は終ったと胸を張っても、そう出来ない人々がいることを心したい。世界中の人々も同じ人間。バスで隣に座っている人も、その一人かも知れない。グローバルという言葉も平和の為に役立って欲しい。